

その 29

万葉ファンタジア

「防人の歌」(その 1)



壱岐の島

「今日よりは かへり見なくて 大君の ^{しこ}醜の御楯と ^{みたて}出で立つ我は」

(今日からは、思い残すことなく大君をお守りするつたない盾となって出て行くのだ、おれは)

^{かちょう}下野国 ^{いままつりべのよそふ}火長 今奉部与曾布(巻 20・4373)

奈良時代に筑紫、壱岐、対馬など北九州を防衛した防人たちは、当初は諸国より徴発されたが、天平 2 (730) 年以後は東国の農民をこれにあてた。防人はいったん難波津に集められ、そこからは船で九州大宰府に送られ、北九州各地に配備された。任期は 3 年。当時 3000 人の防人たちが招集され、毎年兵員の 3 分の 1 が交代した。徴集された防人は、九州まで部領使など係の者が同行して連れて行かれたが、任務が終わって帰郷する際は付き添いもなく、途中で野垂れ死にする者も少なくなかった。

天平勝宝 3 (751) 年、大伴家持は、足かけ 5 年に及ぶ越中守の任務を終え、少納言に任ぜられて帰京。天平勝宝 6 年 (754 年) ^{ひょうぶのしょうふ}兵部少輔に任ぜられると、翌年難波で防人の ^{けんぎょう}検校に関わることになる。

今回の万葉ファンタジア「防人の歌」は、家持の一人語りから始めよう。

私家持は新たに兵部省兵部少輔の任を賜われました。兵部省は軍政や兵事の一切を掌る役所でしたが、職位としては決して栄転と言えるものではありませんでした。しかし、その長官である兵部卿が、私の歌友で、私を引き立ててくれた左大臣橘諸兄どのの長子の奈良麻呂さまでもあり、武門の出の私にとってはありがたい職場だったのですが、もう 1 つ、願ってもない機会が与えられたのです。兵部少輔の任務の 1 つに、北九州守護のための防人を検校する仕事がありましたが、防人と聞いて、はたと思いついたことがありました。これまで集めた東歌の中に数首、心惹かれた防人たちの歌があったことを思い出したのです。

「そうじゃ、願ったりかなったりじゃ。この際防人たちを検校するにあたり彼らの歌を集めることにしよう。そう、それぞれの国の防人を取りまとめる国司や部領使に令を出し、防人たちの歌を集めて難波に持ってこさせよう。そして、その中の良き歌を『万世に語り継ぐ歌集』の最後の巻に収めることとしようぞ」

かつては都として壮大な威容を誇った難波宮は焼け落ち、その後再造営されて当時は行宮として仮の宮となっていました。その難波宮の政庁にある兵部省の役所に、東国の上総国と下総国から、それぞれ防人たちを引率して来た2人の部領使がやって来ました。



(部領使) 戸谷昌弘さんと加藤記生さん

「それにしても、上総からここ難波まで長の旅路であったのう」

「真に、真に。じゃが、下総からここ難波で、まだやっと旅の半ばというところじゃ。難波湊からは、今度は船に乗って筑紫を経て、やっと吉岐、対馬の島々よ」

「なんと苦しき長旅じゃが、なにゆえ、わざわざ東国から防人を徴兵されるのかのう？」

「そうなのじゃ。そもそも九州の国々にも、若き男はたくさんおるといのに、なにゆえかのう」

「そうじゃのう？ 何はともあれ、まずは、ここ難波のお役所で、兵部省のお偉い方にお国で集めた歌を出さなければならぬのう。そうじゃ。そのついでに、その偉いお方に、どうしてなのか聞いてみるとう」

「とんでもない！ そのような畏れ多いことを軽々しく聞けば、『おまえたち、文句があるのか！』と、牢にぶち込まれるかも知れませぬぞ」

「そうか。それ困った。それに、集めた歌は、どれもこれも悲しくて寂しい歌ばかり。お国をお守りする防人の歌とはとても思えぬ」

「われの集めた歌も同じじゃ。子どもではあるまいし、父よ母よなど、女々しくて情けない歌ばかりじゃ」

「……おお、ここが話に聞いた難波宮か！ 古には仁徳天皇さまがここ難波に都を作られたと聞いておる。今は仮宮とのことじゃが、なんと大きなものじゃ」

「また難波宮が都になるって噂も聞いたが、どうなることじゃろう……どうやら、ここがお役所の入口のようじゃ」

2人は、政庁の入口に立っていた門衛に声をかけました。

「ごめんください。兵部省のお偉い方から、防人に行くものたちの歌を集めて、こちらに持って参れというご命令でやってまいりました。いかがしたらよろしいでしょう？」

「そうか、しばし、そこに待っておれ！」

門衛が政庁の中に引っ込み、門前に残された2人は、宮の中を覗き込み不安げに顔を見合わせました。

「かくも立派な宮を見て、なんか恐ろしくなってきたぞ」

「確かにそうじゃ。こんな立派な宮に、子どものような、女々しい歌を持ってきたら、何かお咎めが……」

「そうじゃのう。牢にぶち込まれて、『もっと立派な歌を作るまで牢から出さぬ』、なんてことになったらどうする？」

「くわばら、くわばら……じゃが、どうせ牢に入れられるのなら、なにゆえにこんな東国の農民の歌を集めるのか、それに、なにゆえにはるばる東国から防人を集めるのか、ここはひとつ、ズバリ聞いてみましょう」

「とんでもない。そのようなことを聞いたら、牢に入れられるだけではなく、鞭打ちのお咎めがあるかも」

「わな、わな……待てよ。そう言えば、お隣の安房国の部領使にも声をかけたが、良き歌がなかったとか申し
ていたようじゃった、が……お咎めを怖れて、ともには来なかったのかのう」

「ならば、われらも良き歌がないので出すのをやめるか？」

「うんだ。なら、退散すべえ……危うし、危うし、防人、危うきには近寄らず、じゃ」

2人が逃げだそうとしたその時、門衛が兵部省の偉い人を案内して戻ってきました。

「こら、どちらに参る？こちらに来られよ！兵部少輔、大伴家持どのお越しじゃ」

「は、はあ……」

「このたびは防人のお勤めご苦労である。お主らはいづこの国から来られたか？」

「はあ、上総国は防人の部領使、まむたのさみまる茨田沙弥麿でございます」

「われは下総国は防人の部領使、あがたのいぬかいのきよひと梶犬養浄人でございます」

「東国からの長旅、ご苦労であった。ところで、防人
たちの歌を持ってきてくれたとか。ご苦労であった」

「いえ、それが……良き歌がなかなか集まらなくて…
…申し訳ありません。このたびはどうぞお見逃しを」

「なに！良き歌がない？上総国には、おとめすがる娘子の
歌や下総国には……」

「はい、すがる娘子は、すがる蜂のように腰が細く胸
が大きい娘子、末の珠名姫の歌でございます。われ
も、1度は会って見たかった」



中央(大伴家持)和泉元彌さん

「はい、上総国には、心清らかな乙女、手児奈姫の歌がございます。われも1度は逢うて見たかった」

「そうじゃ、手児奈や珠名という飛び切り良き娘子に、男たちが群れをなした、とか……イヤイヤ、その歌の話
ではない。防人の歌の話じゃ……それで、防人の歌はないと申すのじゃな」

「は、はあ。どうぞお許しを」

「そうであるか……ないものはしょうがない。分かった、ご苦労であった」

家持は政庁に戻ろうとして、一言つぶやきます。

「ないものは仕方ない。折角『万世に語り継ぐ歌集』に載せようと思ったのじゃが」

その何気ない一言を耳にした 2 人の部領使は、家持を呼び止めます。

「……兵部少輔どの！しばしお待ちを…… それでよろしいのでございましょうか？」

「よろしいも、よろしくないも、歌は持って来ておらぬのじゃろう？」

「は、はっ……ですが、『万世に語り継ぐ歌集』とは、いかなるものにございましょう？」

「古の歌人たちの歌、大君から東国の皆のものもの歌まで集めて万世に語り継ぐという歌集だ。今 20 巻程の歌集を作っておるところじゃ。その最後の巻に、防人の歌を載せたいとおったのじゃが」

「兵部少輔さま、今なんと申されましたか？」

「歌集を作って防人の歌も載せたい、と申したが……それがいかがした？」

「いえ、その前にございます」

「お主ら東国のものもの歌、と申した」

「いえ、そのもう一つ前にございます」

「大君やお主ら東国のものもの歌と申したが」

「真にございますか？大君と東国の私どもの歌と一緒に載せてくださるというのでございますか？」

「真じゃ、真に真じゃが……」

「畏れ多くも畏くも、大君のお歌と一緒に！……『万世に語り継ぐ歌集』に載せてくださる、と申されるのでございますか？」

「いかにも」

「左様にございますか。私ども、防人の歌を集めるというのは、そういうことだったのでございますか？」

「ああ、そうじゃ」

「ありがたき幸せにございます！それでは、私どもの下総国には、大君を詠んだ歌が 1 首だけございましたので、お持ちいたしました。お聞きください」

「大君の ^{みこと}命畏み ^{みた}弓の共 さ寝かわたらむ 長けこの夜を」

(大君のご命令は恐れ多く、弓を抱えたまま寝ることになるのだろうか。長いこの夜を)

下総国相馬郡大伴部子羊 (巻二 20・4394)

「おお、素晴らしい歌じゃ！大君もお喜びになられるだろう。是非『万世に語り継ぐ歌集』に載せたいものじゃ」

上総と下総の部領使が兵部少輔の家持と話をしている間に、もう 1 人、部領使が門衛に案内されて来ていました。それまで脇に控えて、3 人のやり取りを聞いていたその男が、この「大君の歌」を聞いて、急に彼らの話に割り込んできたのです。

「兵部少輔どの！私どもには、大君をお守りする防人らしく、もっと勇ましくて立派な歌がございます」

「もっと防人らしく、勇ましくて立派な歌とな？いかなる歌か？」

「大君をお守りする防人の心得を詠った『醜の御楯』の歌
しこ みたて
にございます」

「なに、『醜の御楯』の歌？」

「はい、どうぞお聞きましょう」

「今日よりは かへり見なくて 大君の 醜の御楯と
出で立つ我は」

（今日からは、思い残すことなく大君をお守りするつない
盾となって出て行くのだ おれは）

かちょう いままつりべのよそふ
火長 今奉部与曾布（巻 20・4373）



（演出、朗誦）山崎清介さん

「今日からは天皇の楯となって、命がけで敵と戦うのだ、と高らかに詠い上げておられますが、勇ましい歌にござい
ましよう？防人の長らしい堂々として、天晴れな歌にございましょう、兵部少輔どの？」

「確かに……勇ましく雄々しい歌、じゃが……」

「雄々しい歌……じゃが、と申されましたか？」

「そう、確かにとても良き歌じゃ。だが、お主が申すように、大君のために命がけで戦うと、詠い上げておるのが、
勇ましく天晴れで、いいという訳ではない」

「と申されますと？」

「この歌は、どのような者が詠んだのか？」

「はい、火長の今奉部与曾布と申す者にございますが」

「火長とな……そうだろうよ。10 人を火とする班の、その長のことだ。健気なことよ。愛しい妻や子、父母と
の悲しい別れ。その辛い思いは他の防人たちと同じでも、火長としては、そんな思いを振り払って、健気にも、
このように自らを奮い立たせて出立の音頭を取らねばならなかったのだろう。私のごとき武門の生まれならとも
かく、そのように強がって詠わねばならぬ防人たちの切ない思いが胸に迫っては来ぬか？」

「切ない思いにございますか……はい、そう申されれば、確かに……胸に迫ってまいりました」

「そうであろう……ところで、お主はどここの国のものじゃ？」

「真に失礼申し上げます。われは、下野国の部領使上田口朝臣大戸にございます。兵部少輔どの、『醜
の御楯』のように立派な歌は 1 首しかございませんが、他にもたくさん、下野国の防人の歌が合わせて 18
首もございます。どうぞ、お収めください」

それを耳にした上総、下総の 2 人の部領使も慌てて申し立てました。（次回に続く）